

# 横須賀における米軍向け歓楽街の形成と変化

双木 俊介

## I. はじめに

本稿は、第2次世界大戦後の横須賀における米兵向けの歓楽街の特徴とその変化について明らかにすることを目的とする。

近年、『軍港都市史研究』や『地域のなかの軍隊』など歴史地理学や近代史において軍隊と地域社会の関係に着目し、近代都市について検討する研究が多数みられるようになった<sup>1)</sup>。筆者らも、こうした研究の動向をふまえ、第2次世界大戦以前の軍港都市横須賀の特徴について明らかにしてきた<sup>2)</sup>。本稿の課題は、これまでの戦前期における横須賀の都市形成や商業の研究をふまえ、終戦後の米軍進駐による横須賀の市街地および商業の特徴と変化を検討することである。

米軍の進駐と歓楽街の形成については加藤政洋による沖縄や東京、京都、岐阜などを対象とした研究がみられる<sup>3)</sup>。一方、山本理佳は佐世保における米軍基地の形成とその後の都市の変容について論じている<sup>4)</sup>。また、新井智一や吉田容子も米軍基地と歓楽街、地域社会について検討した成果といえる<sup>5)</sup>。

米軍進駐後の横須賀については、横須賀市史編纂委員会や栗田尚弥らにより米兵向けの歓楽街の動向が示されてきた<sup>6)</sup>。柴田誠規や熊谷哲大らは、商店街の活性化の観点から、横須賀本町商店街の店舗数や経営の変化について明らかにした<sup>7)</sup>。一方、横須賀市は、聞き取り調査により米兵向けの土産店や商店街の変化を検討し、街娼や歓楽街の風紀問題に関する資料の収集をもとに戦後横須賀における商業の動向を示した<sup>8)</sup>。とくに、街娼や風紀問題についての資料はこれまでの自治体史では十分に上げられてこなかったものであり、当時の米兵向け歓楽街の様子を明らかにするう

で貴重なものといえる。また、街娼や風紀取締の問題は、横須賀警察署史発行委員会や、いのうえせつこにより取り上げられている<sup>9)</sup>。一方で、神奈川県立歴史博物館や木本玲一は、進駐軍からの新たな文化の受容に着目し、「米軍基地のまち」における社会の変化を明らかにした<sup>10)</sup>。

しかし、これまでの研究をふまえると、米兵向け歓楽街の形成とその変化によって、第2次世界大戦後の横須賀市中心部における市街地の構造がいかに変化したのか、都市の形成と変容の観点から検討する余地が残される。そこで、本稿では米兵向けの商店、飲食店、サービス業種の分布とその変化に着目したい。なかでも、「スーパーニヤ」<sup>11)</sup>とよばれる米兵向け土産物店、バー、スナック、カフェー、ホテル・旅館などの業種の分布と変化を取り上げ、米兵向け歓楽街の特徴をとらえるとともに、横須賀市中心部における市街地の変化を検討する。

本稿の対象地域と時期は、主として昭和20～昭和50（1945～1975）年代の横須賀市中心部である（第1図）。横須賀は明治期以降、軍港都市として急激な発展をとげたが、終戦後には1867.9万<sup>2</sup>におよぶ旧軍用地（旧軍用財産）はすべて進駐軍に接収された。昭和31（1956）年にはそのうち51%が「駐留軍施設」、6%が「防衛庁施設」であった。その後、「駐留軍施設」の返還は進んだが、平成27（2015）年現在で米軍関連施設は横須賀市域の約3.3%であり、自衛隊関係施設とあわせると市域の約6.4%を占める<sup>12)</sup>。横須賀は今日に至るまで「基地のまち」であるといえよう。加えて、横須賀は米海軍第7艦隊の拠点であり、極東における重要な基地の一つとなっている。とくに本稿の対象地域は、米軍基地（米軍横須賀海軍施設）に隣接する地区であり、終戦直後から米兵向けの

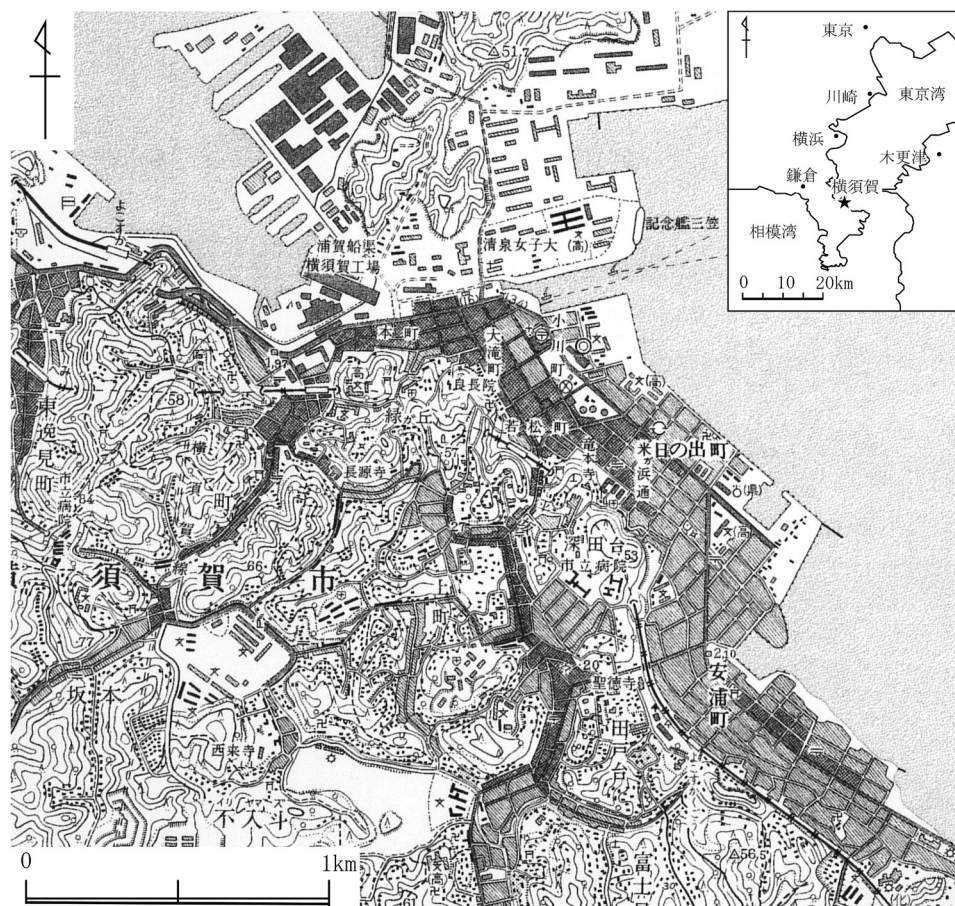
土産店や飲食店、サービス業が展開した<sup>13)</sup>。

対象とする昭和20～昭和40年代は、朝鮮戦争、ベトナム戦争などにより数多くの兵士が進駐し、米軍向けの商業が活況を呈した時期である。加えて、昭和50年代はベトナム戦争終結やドルの変動相場制導入により米軍向け商業に変化のきざしがみえた時期といえる。

これらの商業の分布やその営業の展開を検討するために『商工名鑑』、『明細地図』を利用し、経年的に店舗の変化を検討する。加えて、本稿では神奈川県立公文書館所蔵の広田コレクションのうち、横須賀の商業に関する資料を利用する。この資料群は、横須賀在住の平和運動家で、第五福竜丸展示館初代館長となった広田重道が収集した資

料である。この資料群には横須賀の基地問題や平和運動に関する資料が多数含まれている。また、本資料群のなかには、管見の限りこれまで未紹介の資料もあり、戦後の横須賀における商業を検討するうえでも貴重なものといえる<sup>14)</sup>。

本稿では、これらの資料を用い、昭和20年代の横須賀市中心部の米軍向け商業の動向を検討する(第Ⅱ章)。さらに、その後の米軍向け商業の変化について、現在も「米軍基地のまち」の特徴を色濃く残す通称「ドブ板通り」の位置する本町と、昭和30年代以降に大きく変容した日の出町における歓楽街の変化を取り上げ(第Ⅲ章、第Ⅳ章)、これらの地区の比較を通じて横須賀市中心部の歓楽街の動向について検討する(第Ⅴ章)。



第1図 研究対象地域  
(昭和37(1962)年修正2万5千分の1地形図「横須賀」を使用)

## Ⅱ. 米兵向け歓楽街の形成

### (1) 第2次世界大戦後の商業

横須賀は第2次世界大戦中の建物疎開により建物の一部解体や移転が行われ、市街地に空地が形成されたが、米軍による空襲の被害はほとんど受けなかった。そのため、多くの店舗が終戦後も引き続き営業を続けることができた<sup>15)</sup>。しかし、物資は不足し、「ヤミ市」が市内各地に開設された。

一方で、横須賀において終戦後に急速に発展したのが、進駐した米兵向けの土産品店や飲食、サービス業である。土産品店は「スーベニヤ」とよばれ、昭和20(1945)年11月には「専門店の外に各種の店舗が一斉に土産品を並べ、」「素人が大通りを借りて臨時に土産品店を開店するといふ」とあり、終戦直後から数多く出店された<sup>16)</sup>。また、スーベニヤだけでなく、バーやキャバレーなどの飲食店があいついで立ち並ぶこととなった。1ドルが360円の固定相場時代の兵士たちの消費熱は旺盛であり、米兵向けの歓楽街はにぎわいをみせた<sup>17)</sup>。

米軍をはじめとする進駐兵の増加とともに課題となったのは風紀の問題である。横須賀では終戦直後に風紀治安維持のため、外国人兵士向けの慰安施設が日の出町に開設された。しかし、進駐兵の増加により慰安施設1か所のみでは不足することとなり、戦前期に銘酒屋街であった安浦や船越町の皆ヶ作、遊郭のあった柏木田においても外国人兵士向けの営業が開始された。さらに進駐兵相手の「パンパン」とよばれる街娼が急速に増加し、朝鮮戦争期には横須賀市内における街娼は、約3,000人～5,000人にもものぼった<sup>18)</sup>。

犯罪や風紀問題をはじめ、多くの問題をはらんだ米兵向けの商業であったが、米兵向け商業は、戦後における横須賀の地域経済に大きな影響を与えた。昭和27(1952)年の調査によれば、「基地の将兵全員の1ヶ月のドルと円の交換高は400万ドル(14億4,000万円)で、そのうちスーベニヤに1億4,000万円、キャバレー・ビアホールに1億6,000万円、タクシー・輪タクに7,000万円、街

娼などに1億5,000万円、その他に8,000万円が消費されていた」という<sup>19)</sup>。

昭和44(1969)年の米軍兵へのアンケートによれば、基地駐在あるいは入港中の米軍兵が横須賀において消費する金額は、100ドル～200ドル程度の比率が高く、必ずしも高額とはいえないものの、とくに入港中の兵士は積極的に消費したという(第1表)<sup>20)</sup>。このアンケートにおいて米軍兵らの横須賀での消費内容は飲食29%、娯楽26%、土産品購入18%となっており、米兵向けの飲食、娯楽、土産品販売をはじめとするサービス業は、ベトナム戦争が終結する昭和50(1975)年ころまで活況を呈した。

### (2) 昭和20年代における米兵向け店舗の分布

米兵向け小売、飲食、サービス業がとりわけ盛況であった時期は、朝鮮戦争期であった。横須賀基地は朝鮮半島への拠点として、アメリカ本土から動員された兵士や、朝鮮半島から帰任した兵士でにぎわった。

米兵向け小売、飲食、サービス業の全盛期であった朝鮮戦争期の昭和28～29(1953～1954)年における「A級飲食店」とスーベニヤの分布を示したものが第2図である<sup>21)</sup>。

A級飲食店とは、昭和28年に発足した「横須賀市A級倶楽部」に加入した店舗である<sup>22)</sup>。この組合により「保健衛生」の観点から「優秀」とされた店舗は、店先に「A級店舗」の看板をかがげ

第1表 横須賀への入港・駐在時における米軍兵の消費金額—昭和44(1969)年—

| 金額               | 人数(人)       |
|------------------|-------------|
| 100ドル未満          | 34 ( 25.6)  |
| 100ドル以上200ドル未満   | 30 ( 22.6)  |
| 200ドル以上300ドル未満   | 17 ( 12.8)  |
| 300ドル以上500ドル未満   | 14 ( 10.5)  |
| 500ドル以上1,000ドル未満 | 2 ( 1.5)    |
| 1,000ドル以上        | 1 ( 0.8)    |
| 無回答              | 35 ( 26.3)  |
| 計                | 133 (100.0) |

注) ( ) 内は%。

(『本町通り商店街診断報告書』により作成)



ることが許された。昭和28年には横須賀市内で102軒をこえる店舗が「A級店舗」として許可されたという<sup>23)</sup>。一方で、スーパーの分布は昭和29年に刊行された『横須賀三浦商工名鑑』に記載された店舗を示した。

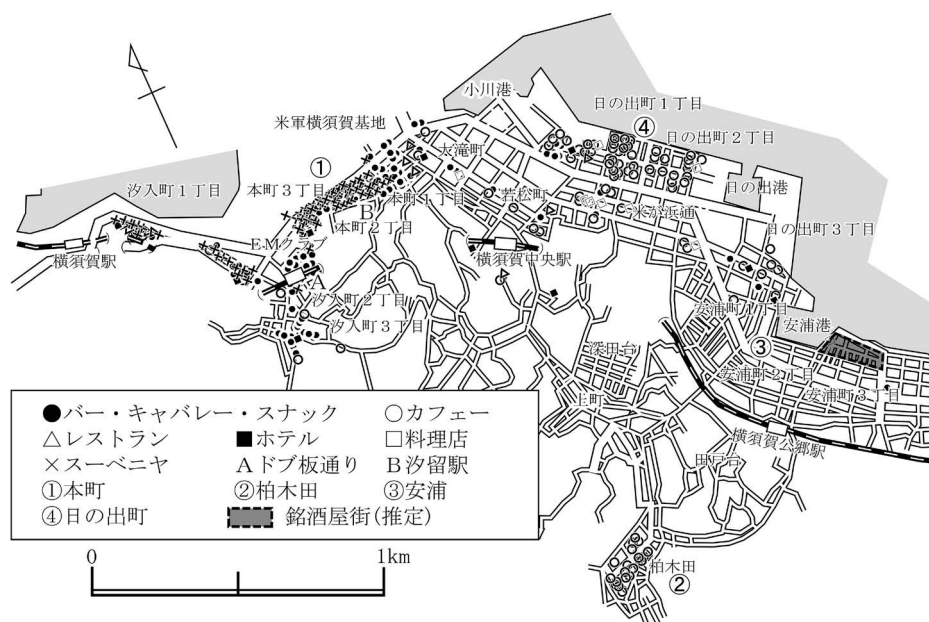
米兵向けの土産物店、飲食店、サービス業の集中する地区は、①米軍基地沿いのドブ板通りを中心とした汐入から本町にかけての地区、②上町3丁目（柏木田）、③安浦町、④日の出町である。また、料理店やカフェーなどは大滝町、若松町、米が浜にもみられる。

まず、米兵向けの店舗が集中するのは、①横須賀駅から汐留駅（現、汐入駅）、本町にかけての米軍基地（ベース）沿いである。この地区にはスーパーととともにキャバレーやバーなどの飲食店が多数みられた。

一方で、②～④の地区にはスーパーはみられず、キャバレー、バー、カフェーなどの飲食店のみが集中した。その背景には②・③がいずれも戦前期以来の遊郭や銘酒屋街であったことが考えら

れる。②柏木田には明治21（1888）年に遊郭が開設された。加藤晴美によれば、柏木田遊郭の客層は横須賀に駐屯する陸・海軍の士官をはじめ、豪商など富裕層に属する人々であったという<sup>24)</sup>。戦後になると柏木田遊郭は公娼制度の廃止により赤線地区に指定された。柏木田には英語ができるホステスも多く、米軍将校にも利用された<sup>25)</sup>。

③安浦は、大正11（1922）年に埋め立てによって開発された地区である。第2図では安浦町1丁目、2丁目に飲食店が分布しているが、これは隣接する安浦町3丁目が戦前期以来「銘酒屋街」となっていたからであると考えられる。安浦町3丁目は、昭和初期には私娼を置く銘酒屋街となり、80軒程度の銘酒屋が軒を連ねた。安浦の銘酒屋の客は、海軍軍人や海軍工廠の職工、遠洋捕鯨船の船員などが中心であった。しかし、戦後になると、米軍兵士相手の私娼があふれることとなった。柏木田、安浦は戦前から遊郭や銘酒屋街であった地区であり、戦後も継続して飲食、サービス業が集積していた。



第2図 横須賀における米軍向け商店・飲食店の分布  
—昭和28～29（1953～1954）年—  
（「A級店舗調査票」、『横須賀三浦商工名鑑』により作成）

それに対し、④日の出町は、昭和4～昭和6（1929～1931）年にかけて埋め立てにより開発された地区である。開発当初は住宅や港湾施設として利用が計画された地区である。後述するように、昭和20年の慰安施設の開設により、この地区は歓楽街へと変容したと考えられる。

①本町は明治期以来の基地に隣接した商業地区であり、②柏木田、③安浦も戦前期以来の遊郭や銘酒屋街であり、すでに戦前期から米兵向け歓楽街形成の基盤を有していたといえる。しかし、④日の出町は、第2次世界大戦後に歓楽街として発展した地区であり、①～③の地区と歓楽街形成の経緯は異なっていた。

### Ⅲ. 本町における歓楽街の形成と変化

#### （1）米兵向け商店・飲食店の集積

海軍鎮守府や海軍工廠に隣接した本町は、横須賀のなかでも最も古くから市街地の形成が進んだ地区の一つである。戦前期の本町は軍人や職工を対象とする商店や飲食店、土産店や写真館などが立ち並ぶ商店街であった。なかでもドブ板通りが商店街の中心となり、この通りの西端には海軍下士官集会所が設置され、にぎわいをみせた<sup>26)</sup>。

終戦後、米軍基地に隣接する地区として進駐した兵士でにぎわったのも、ドブ板通りのある本町や汐入一帯であり、米兵向けのスーベニヤやバー、キャバレーなどの飲食店が数多く開店した。昭和28年の本町における飲食店の数は、「A級店舗」だけでも39軒、昭和29年のスーベニヤの店舗数は59軒におよんだ<sup>27)</sup>。また、ドブ板通りの西端にあった海軍下士官集会所は、進駐軍に接收され「EMクラブ」<sup>28)</sup>となり、米軍下士官兵の遊興の場となった。昭和20年代から40年代のドブ板通りは、米兵向けの商店、飲食店が立ち並び、行き交う客はほとんどがベースの兵士であり、日本人の姿はほとんどなかったという<sup>29)</sup>。

#### （2）昭和30年代以降の変化

第3図は昭和35（1960）年、昭和45（1970）年、

昭和56（1981）年における本町のスーベニヤ、飲食店、宿泊業の分布とその変化を示したものである。本町では、ドブ板通り、国道16号線沿いにスーベニヤや飲食店が軒を連ねた。また、これらの通り以外にも飲食店が数多くみられた。とくに本町2丁目、3丁目の店舗のほとんどがスーベニヤや飲食店であったことがわかる。

しかし、昭和29年に59軒であったスーベニヤの数は、昭和36（1961）年には27軒、昭和45年には28軒と全盛期から半減した点は注目できる<sup>30)</sup>。また、裏通りにまで軒を連ねた飲食店もしだいに減少していった。

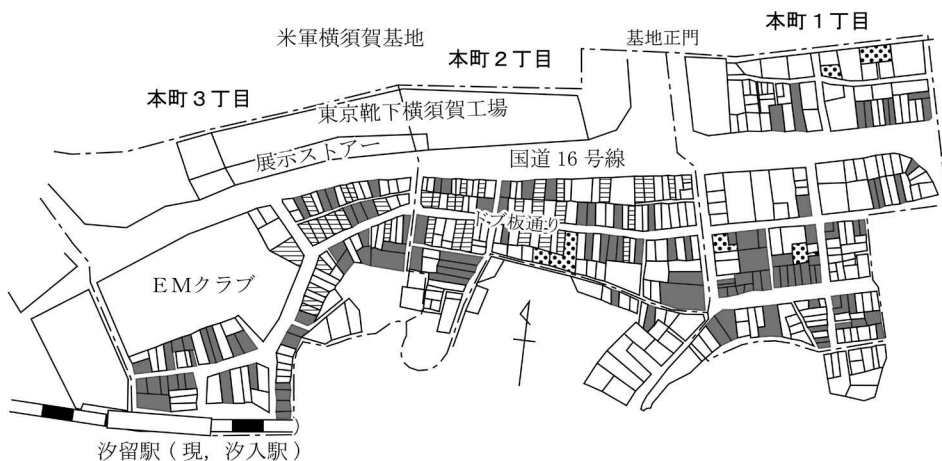
昭和44年に実施された米軍兵へのアンケートによれば、横須賀へ入港・駐在した米軍兵が日本で購入したい土産品は、音響電気製品、カメラなどが人気であった<sup>31)</sup>。スーベニヤで取り扱う土産品は、主として絹製品や刺繍加工品、陶器類などであり、スーベニヤの取扱商品は米軍兵の購入希望品と異なるようになっていた。

また、基地への艦船入港数の減少、昭和46（1971）年のドルショックやその後のドル変動相場制への移行により、米軍兵を対象とした商業は転機をむかえていた。こうした変化に対し、本町商店街では、「アメリカ人のまち」のイメージを残して」日本人向けの物販業への転換をはかろうとしていた<sup>32)</sup>。その背景は、週刊誌などでドブ板通りのワッペンやジープの販売店が紹介されたことで、日本人の若者の来店が増加していたことにある。昭和40年代後半から50年代になると、こうした日本人の顧客が安心して買い物できるまちづくりが商店街において模索されつつあった。

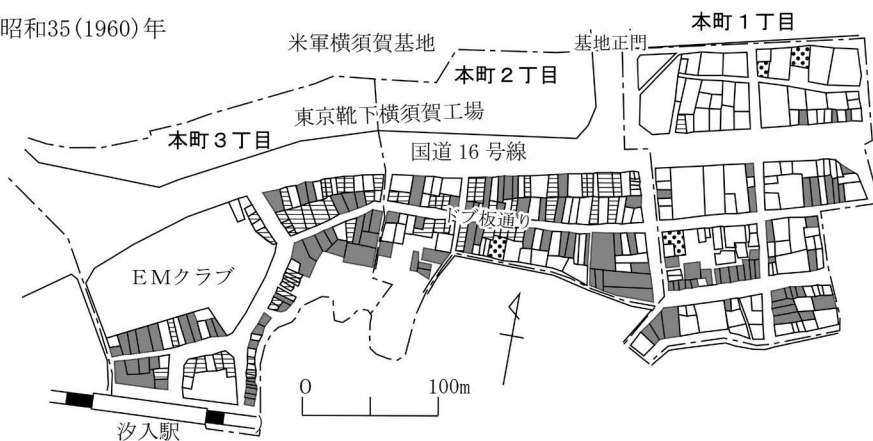
### Ⅳ. 日の出町における歓楽街の形成と変化

#### （1）安浦ハウスの開設と歓楽街の形成

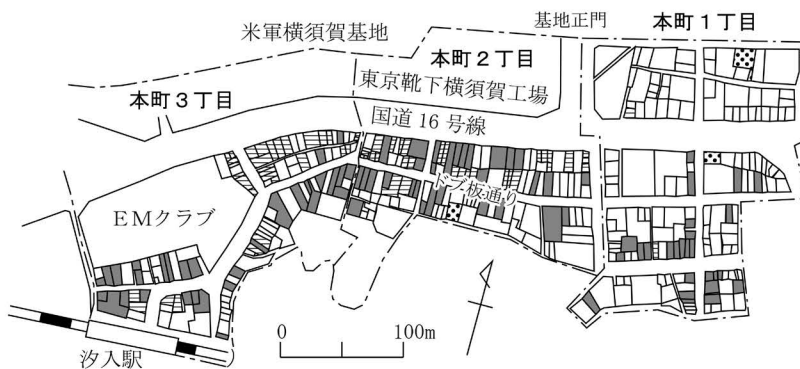
日の出町は、先述のように昭和4年に埋め立てにより開発された<sup>33)</sup>。埋め立て後、住宅地として飛鳥組などにより分譲がはじまった。しかし、利用は十分には進展せず、空地も目立っていたという<sup>34)</sup>。



a) 昭和35(1960)年



b) 昭和45(1970)年



c) 昭和56(1981)年

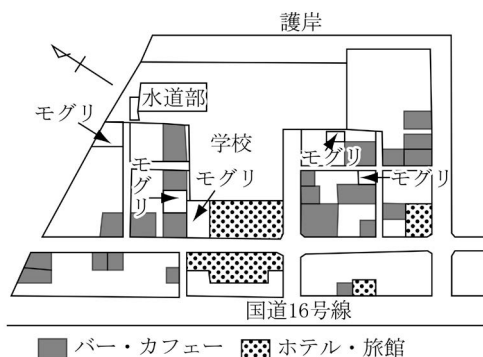
飲食店
  スーパーニヤ
  ホテル・旅館
  町丁境

第3図 横須賀市本町における米軍向け商店・飲食店の分布と変化  
 注) a) 昭和35年の図は、原図が実測図ではないため、縮尺を示していない。  
 (『横須賀市明細地図 昭和35年版・昭和45年版・昭和56年版』により作成)

日の出町には第2次世界大戦後の占領軍の進駐にともない、昭和20年9月3日に海軍工員宿舎に「安浦ハウス」とよばれる米兵向け「慰安施設」が開設された。この慰安施設の開設には横須賀市終戦連絡委員会や警察などが関与し、日の出町に隣接する安浦町から安浦私娼組合の接客婦170人を出張させて営業した<sup>35)</sup>。

安浦ハウスでは開設直後から花柳病（性病）が問題となった。花柳病の蔓延により安浦ハウスは開設直後の9月14日に一時閉鎖された。安浦ハウスの閉鎖はまもなく解除されるが、昭和21（1946）年1月にGHQから発せられた「公娼廃止に関する覚書」により、占領軍用慰安施設の廃止が決定され、安浦ハウスも閉鎖されることとなった。

しかし、安浦ハウスの開設を契機として、日の出町では米兵向けのバーやカフェー、ホテルなどが営業をはじめた。神崎清の調査によれば、昭和28年ころには日の出町1丁目には22軒ものバーやカフェーなどの飲食店、4軒の宿泊施設が営業していた（第4図）<sup>36)</sup>。さらに、「モグリ」とよばれる無許可の営業も確認できる。日の出町は横須賀における米兵向け歓楽街の一つとして、安浦ハウス開設後に急速に発展していったことが指摘できる。



第4図 横須賀市日の出町1丁目付近における  
米軍向け飲食店・サービス業の分布  
—昭和28（1953）年ころ—

注）資料の性格上、空白部分は不明。  
原図は実測図ではないため、縮尺は示していない。  
（『戦後日本の売春問題』により作成）

## （2）昭和30年代以降の変化

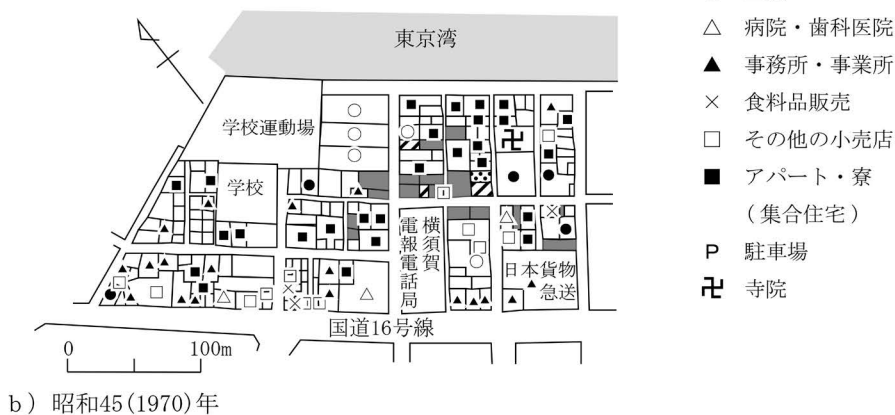
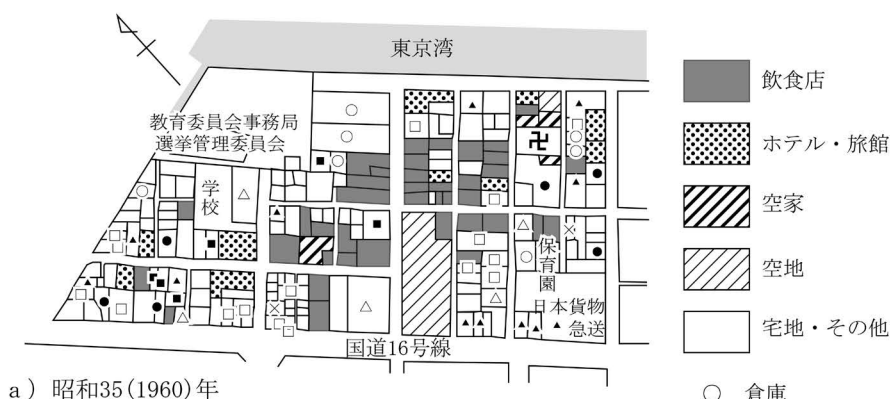
『横須賀警察署史』によれば、昭和33（1958）年の売春防止法の施行にともない、日の出町の特殊飲食店はほとんどが廃業したという<sup>37)</sup>。しかし、第5図-aの昭和35年における土地利用から、バーやカフェーなどの飲食店や宿泊業の多くは、継続して営業していたことがわかる。また、日の出町1丁目の東側は東京湾に面しており、隣接する日の出町2丁目・3丁目には日の出港があり、海側には倉庫が立ち並ぶ。西側は国道16号線であり、貨物や運輸をはじめとする事業所が多い。加えて、飲食店の背後には保育園や学校もあった。日の出町は、歓楽街であるとともに、港湾地区の倉庫、運送機能や教育施設、住宅などの混在した地区であったといえる。

昭和45年になると、ホテル、旅館はすべて廃業し、バーやカフェーは、横須賀電報電話局の東側の街区のみに確認できる。日の出町1丁目では昭和35年～45年に宿泊、飲食業の営業が激減したといえる（第5図-b）。一方で、注目すべき点は、宿泊、飲食業の減少とともに、アパートや寮などの集合住宅が増加したことである。昭和35年と45年の1筆ごとの地割を比較すれば、地割の変化はほとんどみられない。また、安浦町や柏木田における特殊飲食店では、廃業後の店舗をそのまま賃貸アパートへと転用した事例が確認できる<sup>38)</sup>。このことから日の出町1丁目でも宿泊、飲食業の多くが、店舗をアパートや寮などの集合住宅へと転用したと考えられる。

その後、昭和56年になると、スナックの営業は1軒のみとなった（第5図-c）。昭和45年にスナックやバーであった店舗の一部はレストランや食堂などに転業しているものの、飲食店はほとんどなくなった。また、駐車場の増加、ビルやマンションの建設により日の出町の景観は変化しつつあったといえる。

加えて、昭和56年での大きな変化は、図中の中央にあった学校が昭和46年に閉校したことである。学校跡地は横須賀合同庁舎<sup>39)</sup>、横須賀市職能更生センターへと転用された。さらに、海面の埋





第5図 横須賀市日の出町1丁目における商店・飲食店の分布と変化  
 注) a) 昭和35年の図は、原図が実測図ではないため、縮尺を示していない。  
 (『横須賀市明細地図 昭和35年版・昭和45年版・昭和56年版』により作成)



め立てが進展し、埋め立て地にも労働福祉会館などの施設が建設された。横須賀合同庁舎には財務局、防衛局、法務局などの機関が入った。その結果、昭和35年には宿泊、飲食店が軒を連ねた地区には、おもに法務局への申請書類作成や手続きを行う行政書士事務所が多数立地している。

このように、日の出町1丁目は、終戦後の占領軍の進駐にともない安浦ハウスが開設され、これを契機として米兵向けの歓楽街が形成されていった。しかし、昭和33年の売春防止法の施行後に米兵向けの宿泊、飲食業はしだいに減少し、店舗の多くはアパートなどの集合住宅に転用されていった。その後、学校跡地や周辺の新たな埋め立て地に官公庁が移転したことともない、官公庁と関連する事業所が立地することとなった。新たな施設の立地にともない、日の出町1丁目の土地利用や業種は大きく変化していったことが指摘できる。

## V. むすびにかえて

本稿は第2次世界大戦後の横須賀における米兵向け土産品店、飲食店、宿泊業などの分布と変化に注目し、横須賀における市街地の変化を検討した。

終戦直後から横須賀では米兵を主とする進駐兵向けの商業が展開した。こうした米兵向けの商業が分布し、歓楽街が形成した地区は、①ドブ板通りを中心とした米軍基地に隣接する本町、汐入、②柏木田、③安浦、④日の出町であった。

①ドブ板通りを中心とした地区は、明治期以来の基地に隣接した商店街が基礎となり、戦後には米兵向けのスーパーや飲食店が軒を連ねるようになった。

②柏木田、③安浦は戦前期において遊郭、銘酒屋街であった地区である。こうした戦前期からの歓楽街が、進駐する兵士向けの特殊飲食店へと転換していったと指摘できる。一方で、④日の出町は、慰安施設の開設とともに、飲食店や宿泊業が集積する地区へと変容したとみられ、戦後の米軍

進駐を契機として新たな歓楽街が形成されたといえよう。

戦前以来の商店街から米兵向けの商店が集積するようになった本町では、昭和30年代以降も米兵向けのスーパーや飲食店が軒を連ねていたが、その数はしだいに減少していった。とくにスーパーの減少は顕著であった。その背景には米軍兵の横須賀への入港、駐在数の減少も考えられるが、米軍兵が日本において購入を希望する土産品が絹製品や陶器類などから電気製品などへと変化したことも一因にあげられよう。また、昭和40年代のドルショックも米兵向け商店の営業に大きな影響をもたらした。こうした商店の営業状況の変化のなかで、本町商店街は米兵向け商店街の雰囲気を残しながら、日本人の若者を顧客とした商業へと転換しようとしていた。

一方で、日の出町は、終戦後の特殊慰安所の開設を契機として歓楽街が形成された。昭和20年代末にはカフェや宿泊業などが集積したが、昭和33年の売春防止法の施行により営業の取り締まりが強化され、その数はしだいに減少した。その結果、アパートなどへの転業や官公庁の移転、行政書士事務所のような事業所の増加により、歓楽街の景観は大きく変化した。日の出町は、歓楽街の消長を検討するための好例として注目される。

戦後横須賀の歓楽街は、特殊慰安所の設置、売春防止法の施行をはじめとする風紀対策や朝鮮戦争、ベトナム戦争などの政治的要因、ドル変動相場制への移行などの経済的要因により、横須賀中心部の市街地内部においても、それぞれの地区によって歓楽街の消長は時期的に差異がみられることが明らかになった。

こうした米兵向け歓楽街の消長の背景について、本稿ではその一端を示したが、この点についてはより一層の検討が必要となる。とくに、日の出町における業種の転換については、事業者の意思決定を個別的に検討することが課題となる。また、近年、横須賀市では「基地のまち」であることを生かしたまちづくりが進められている。「海軍カレー」、「ネイビー・バーガー」の販売や「軍

港めぐり」などがその一例といえる。こうした商業の変化についても本稿では指摘するにとどめる。一方、米軍基地返還や平和運動などとともに進展する「平和産業港湾都市」への転換をめざす動向も戦後における横須賀の特徴を検討するためには不可欠になろう。これらの点については今後の課題としたい。

## 〔付記〕

本報告の作成にあたり、横須賀市自然・人文博物館学芸員の安池尋幸氏には、資料の提供や多くのご教示を賜りました。横須賀市基地対策課、横須賀市市史編纂室には資料の所在に関するご助言を賜りました。上記のほか、横須賀市立中央図書館、神奈川県立図書館、神奈川県立公文書館には、所蔵資料の閲覧、複写、撮影のご許可をいただきました。また、加藤晴美氏（現、筑波大学非常勤講師）からは資料分析に際しご助言を賜りました。以上記して厚く御礼申し上げます。

## 〔注〕

- 1) 坂根嘉弘編『軍港都市史研究Ⅰ 舞鶴編』清文堂、2010。上杉和央編『軍港都市史研究Ⅱ 景観編』清文堂、2012。河西英通編『軍港都市史研究 呉編』清文堂、2014。荒川章二編『地域のなかの軍隊Ⅱ 関東 軍都としての帝都』吉川弘文館、2015。なお、本書は9巻シリーズのうちの1冊であるが、本稿の対象とする横須賀が上げられている上記のみを示す。
- 2) ①双木俊介・藤野 翔「軍港都市横須賀の形成と土地所有の変遷－横須賀下町地区を事例に－」歴史地理学野外研究13, 2009, 1-23頁。②花木宏直・山邊菜穂子「東京湾要塞地帯における第二・第三海堡の建設と住民の対応－横須賀・永嶋家にみる富津漁民との関わり－」歴史地理学野外研究14, 2010, 1-30頁。③加藤晴美「軍港都市横須賀における遊興地の形成と地元有力者の動向」歴史地理学野外研究14, 2010, 31-54頁。④双木俊介「軍港都市横須賀における商工業の展開と「御用商人」の活動－横須賀下町地区を中心として－」歴史地理学野外研究14, 2010, 55-80頁。⑤双木俊介「軍港都市横須賀における宅地開発の進展と海軍士官の居住特性－横須賀上町地区を中心として－」歴史地理学野外研究16, 2014, 1-20頁。
- 3) 加藤政洋『敗戦と赤線―国策売春の時代』光文社、2009。加藤政洋『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』フォレスト、2011。
- 4) 山本理佳『近代化遺産』にみる国家と地域の関係性』古今書院、2015。
- 5) 新井智一「東京都福生市における在日米軍横田基地をめぐる「場所の政治」」地学雑誌115-5, 2005, 767-790頁。吉田容子「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応―「奈良 RR センター」の場合」地理科学65-4, 2010, 245-265頁。
- 6) ①横須賀市史編纂委員会編『横須賀市史』横須賀市、1957。②横須賀市編『横須賀市史 市制八十周年記念 上巻』横須賀市、1988。③粟田尚弥編『米軍基地と神奈川』有隣堂、2011。
- 7) 柴田誠規・鍛佳代子・樫原 徹「在日米軍周辺の商店街の研究―横須賀海軍施設とドブ板通り商店街の変遷とその相関―」日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）2005年9月、2005, 499-500頁。熊谷哲大・後藤春彦「米軍基地周辺商店街の経営環境変化への対応方法と現状―横須賀市本町商店街を対象として―」日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）2011年8月、2011, 133-134頁。
- 8) ①横須賀市『新横須賀市史 別編 民俗』横須賀市、2013。②横須賀市『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅲ』横須賀市、2009。③横須賀市『新横須賀市史 通史編 近現代』横須賀市、2015。
- 9) ①横須賀市警察署史発行委員会編『横須賀市警察署史』横須賀市警察署史発行委員会、1977。②いのうせつこ『占領軍慰安所』新評論、1995。
- 10) 神奈川県立歴史博物館編『ヨコハマ・ヨコスカストーリー―二つの港町の戦後文化―』神奈川県立歴史博物館、2008。木本玲一「地域社会における米軍基地の文化的意味―「基地の街」福生・横須賀の変遷（難波功士編『米軍基地文化 叢書戦争が生み出す社会Ⅲ』新曜社、2014）、151-171頁。
- 11) スーベニヤとは、英語の「土産品店」を意味する「Souvenir Shop」から生まれた呼称であり、「スーベニ屋」などともよばれた。
- 12) 前掲6) ②, 587頁。横須賀市基地対策課『横須賀市と基地』<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/0150/kithitai/>（最終閲覧日2016年2月3日）。なお、平成27（2015）年現在で旧軍用地のうち17.4%が米軍関係施設、14.9%が自衛隊関連施設である。
- 13) 前掲8) ①, 329-335頁, 380-387頁。前掲8) ③, 983-991頁, 1011-1013頁。
- 14) 広田コレクションのうち、本稿では横須賀の飲食店などに関する資料のみ利用した。本資料群をさ

- らに利用し、戦後の横須賀における基地問題や平和運動に関して検討することは今後の課題としたい。
- 15) 前掲 8) ②, 902-903頁。
  - 16) 前掲 8) ②, 1009-1010頁。
  - 17) 前掲 8) ③, 984頁。
  - 18) 前掲 8) ①, 333-335頁。前掲 9) ①, 135-143頁。  
高橋芙蓉「朝鮮事変下に於ける基地街娼の実態—基地横須賀の場合—」1953初出, (『性暴力問題資料集成 第7巻』不二出版, 2004所収)。
  - 19) 前掲 8) ③, 990頁。
  - 20) 神奈川県商工指導所『本町通り商店街診断報告書』神奈川県商工指導所, 1970。
  - 21) ①「A級店舗調査票」(神奈川県立公文書館所蔵広田コレクション: 箱13-2袋9-113), ②横須賀商工会議所『横須賀三浦商工名鑑』横須賀商工会議所, 1954により作成。なお, 広田によれば, 横須賀市内の「A級店舗」は, 第2図中以外に佐野町, 三春町, 西逸見町, 東逸見町, 大津町, 大津谷町, 追浜本町, 追浜南町, 追浜東町, 大田和に確認できる。前掲21) ①は, 広田重道により整理された横須賀市A級倶楽部に加盟する「A級店舗」の一覧である。広田の調査による前掲21) ①には, 前掲21) ②を上回る店舗の記載が認められる。前掲21) ①には銘酒屋街であった安浦町3丁目の飲食店が一切記載されていないなどの資料的制約もあるものの, 横須賀市内の米軍向け飲食店について検討するための貴重な資料といえる。
  - 22) 「昭和二十八年五月現在 横須賀市A級倶楽部規約」(神奈川県立公文書館所蔵広田コレクション: 箱13-2袋9-112)。
  - 23) 横須賀商工会議所創立60周年記念特別委員会, 横須賀経済経営史年表編集委員会編『横須賀経済経営史年表』横須賀商工会議所, 1990, 156頁。
  - 24) 前掲 2) ③, 46頁。
  - 25) 前掲 9) ②, 133頁。
  - 26) 前掲 2) ④。
  - 27) 前掲21) ①。
  - 28) 「EMクラブ」とは階級別クラブ ‘Enlisted Men’s Club’ を意味する。
  - 29) 前掲 8) ①, 382頁。
  - 30) 横須賀商工会議所『横須賀商工名鑑 昭和36年版』横須賀商工会議所, 1961。横須賀商工会議所『横須賀商工名鑑 昭和45年版』横須賀商工会議所, 1970。
  - 31) 前掲20)。
  - 32) 神奈川県商工指導所『本町通り商店街造成診断報告書』神奈川県商工指導所, 1972。
  - 33) 日の出町の埋め立て開発については, 前掲 2) ①を参照。
  - 34) 中央地域文化振興懇話会編『よこすか中央地域町の発達史1』横須賀市, 2006, 34頁。
  - 35) 前掲 8) ③, 987頁。前掲 9) ①。前掲 9) ②。
  - 36) 神崎清『戦後日本の売春問題』社会書房, 1954初出, (『性暴力問題資料集成 第7巻』不二出版, 2004所収)。
  - 37) 前掲 9) ①, 146頁。
  - 38) 前掲 8) ①, 335頁。
  - 39) 横須賀合同庁舎は, 平成25(2013)年に新港町へ移転した。